

恋愛の微醺

林芙美子

青空文庫

恋愛と云うものは、この空気のなかにどんな波動で飛んでいるのか知らないけれども、男が女がこの波動にぶちあたると、花が肥料を貰ったように生々として来る。幼おとこない頃の恋愛は、まだ根が小さく青いので、心残りな、食べかけの皿をとってゆかれたような切ない恋愛の記憶を残すものだ。老ふけた女のひとに出逢うと、娘の頃にせめていまのようなところがあつたらどんなによかつたでしょうと云う。だから、心残りのないように。深尾さんの詩に、むさぼりて 吸へどもかなし 苦にがさのみ 舌にがにのこりて 吸へどもかなし、ばらの花びら こんなのがある。どんな新らしいと云う形式の恋愛でも、吸へどもかなし 苦にがさのみで、結局、魂の上にがに跡をとどめるものは苦にがさのみじゃないだろうか。私は新らしいと云う恋愛の道にがを知らない。新らしいと云うのは内容のかわった恋愛と云う意味ではなく、整理のついた恋愛を云うのかも知れないけれども、すぐ泥にまみれたかたちになつてしまう。—— 懶惰らんだで無気力な恋愛がある。仕事の峠とうげに立つた、中年のひとたちの恋愛はおかたこれだ。

この間も、ある女友達がやって来て、あなたはいま恋愛をしていないのかと訊きく。恋愛もいけれど怖いようなど云うと、その友達ともだちは恋愛になまけてしまつてはいけない、恋を

すれば、仕事も遅ましくなり、からだ 軀も元氣になるものと話していた。

その友達の話して行つた中、こんな例がある。子供が二人あつて、良人おっとに死別した絵を描く若い寡婦が、恋の気持ちを失つて来ると、心がだんだん乾いて来て、生活がみじめになつて、絵もまぶしくなり、容貌も衰えて、どうして生きていいのか解らなかつたのだけれども、ふとすきな青年をみつめて、その男と仲よくなつてしまつたら、急に容貌も生々と美しくなり、絵もうまくなり、そうして、何より面白いことには、二人の子供を叱しからなくなつたと云うことだ。恋愛のない時分は、いつも苛いら々としていて、朝から晩まで子供ばかり叱つていたのだと云う。

道徳の上から律してゆけば、この未亡人の恋愛はどんな風なものなのか、私には解らなけれども、これは可憐かれんな話だとおもう。恋人に逢つた翌あく日は、てきめんに生活が豊富になると云うのだ。この若い寡婦はまた、その男とは結婚しないと云う約束のもとに二、三年も濃こまやかな愛情をささげおうていると云うことだが、こんな恋愛は新らしいとは云えないだろうか。結婚をするといつぺんに厭いやになりそうな男だけれども、恋愛をしていると、何かしげきされて清すがすが々しいのだと云うことだ。——十代の女の恋愛には、飛ぶ雲のような淡さがあり、二十代の女の恋愛には計算がともない、三十代の女には何か慘ざん酷こくなもの

があるような気がする。

本当の恋愛とはどんなのをさして云うのだろう。サーニンのようなものを云うのだろうか、エルテルの悩みのようなものだろうか、それとも、みれん、女の一生、復活、春の目ざめ、ヤーマ、色々な恋愛もあるけれども、どれもこれも古くさくてぼろぼろのようだが、また、考えれば、どれもこれも新しいとも云える。——恋愛をしてごらんさい生々するから、そう云った友達の言葉が、私につぶてになつて飛んで来る。すると、いままで良人の蔭で目をつぶっていたような気持ちだが、急に生々とたちあがつて羅紗らしゃの匂いの新らしい背広姿に好意を持つたり、襟えり足あしの美しさや、時には、よその男のもっている純白なハシカチの色にさえ動悸どつきのするような一瞬があるのだ。そうして、その動悸は肉体を苛いためつけるような苦しいものともなっている場合がある。よその奥さんの気持ちの中に、こんな気持こころはミジンも湧いて来ないものだろうか。結婚をして、一人の男を知ると十七、八の娘のころのように雲のような恋愛はいやになつてしまふ。恋愛の気持ちのあるたびに、いちいち良人と別れるわけにもゆかないけれども……。

十年も連れ添うた夫婦で云えば、良人の方には色々なかたちで愉しみの世界があるけれども、奥さんはどんな風にしてとしをとつてゆくのだろう。結婚をしているひとたちの恋

愛には交通巡査がいる。あぶなくないように恋をしなければならぬ。あやまってよそのく
るまに突きあたろうものなら、入院費もかかるし、家族も仕事に手がつかない。交通の整
理された恋愛は、悪いことだとはおもわれない。私は現在ひとの奥さんだけれど、しみじみ
こんな事を考える折がある。旦那様に対して申しわけのないことだけれども、旦那様だつ
て何を考えているか判つたものじゃない。きびしい眼からみれば、ふしだらな事かも知れ
ないけれども、この世にあふれている無数の夫婦者の中に、こんな気持ちのない夫婦者は
おそらく一人もありはしないだろう。一人の処女が結婚をして、初めてよその男に恋をす
るのは、あれはどうした事なのだろうか。見合結婚をして、一人の男の経験が済むと、何
か一足とびに違つた世界に眼がとどいてゆく。良人の友達の中に、あるかなきかの恋情
を寄せてみたりする場合もある。そのあるかなきかの恋情は、ほんの浮気のでいで、家
庭を不幸にするものじゃないとおもうがどうでしょうか。

良人と添寝そいねしながらも、なおかつよその男の夢を見るのだ。その夢の中の男をしばって
貰うわけにはゆかない。これも、変型だが、恋愛の一つだろう。たとえクリスチャンの奥
さんでも、こんな夢の一つ二つの記憶はあるに違いない。交通整理のゆきとどいた町には
怪我人が少ないように、恋愛の道には整理が必要だ。

理想的な恋愛を私に云わしむれば、およそ悲劇的な影のない恋愛がのぞましい。私の知人にこんな例がある。その男は五十歳の男だ。奥さんと大学に行く子供がある。非常に平和な家庭で、波風一つたない生活だそう。だが、その五十になる男のひとには、奥さんと同じ年配の恋人があり、ちょうど十五年も恋愛関係がつづいてると云うのだ。何と云う愕おどろくべき旦那様なのだろう。その十五年の間に、恋人はある商人の家に嫁に行ったが、それでも一年に一ぺんは逢うと云うのだ。七夕のようだとその男のひととは笑っていたが、私は吃驚した。奥さんはただの一度も旦那様をうたがわないし、十五年も恋人と逢いつづけているとは露ほども知らないのだと云う。こんな大嘘つきの旦那様を持った奥さんは幸せと云つていいのか不幸と云つていいのかわからないけれども、私から云えば、おそらく、幸福なひとのような気がする。おそらく、その男のひとは、棺かん桶おけへ這はい入るまで、奥さんをだましおおせるに違いあるまい。奥さんは良人が死んでからも、あのひとはいいひとだったと幸せに思っている事だろう。その男のひとの云うのには、恋人があつたから、至れりつくせりの真情をもつて妻を愛しておられた。だから奥さんは浮気心をおこすひまがないのだそう。毎日洗濯をしたり、子供と散歩したりして、幸福らしいと云うのだ。では、その恋人の気持ちはどんなものでしょうと尋ねると、これもまた、十五年の長い歴史があ

るから、何も云わなくても、かなしみもよろこびも判りあい、不貞だとはおもっていないと云うことだ。恋愛を悲劇にしてしまうのは、恋愛に甘くなるからだろう。正直になろうとしたら、その恋愛に純粹になろうとすることは、さしきわりのない人間同士の間のことだ。未婚の男女の恋愛には、既婚者のように徹するような思慮があるだろうか。私は解らなくなってしまう。

恋愛に就いて、正直も純粹も大切だとはおもうが、もつと大切なことは、自分の周囲に火の粉を散らさぬ用心だろう。つましい朗らかな恋愛だったら、不貞と云いきれないよくな気がする。だが、かなしいことには人間同士だから、よっぽど用心しないことには泥まみれになり、あたりの人に笑われなければならない結果になることもある。

恋愛をすれば、勿論肉体も精神もそれにとまなつてゆくべきだろうけれど、もしも私に、恋愛がみつかったならば、私は恋人に身心をささげながら妙なかしやくを感じるだろう。私たちの生きている世代ではこれは不貞至極なことだからだ。もしも、私にこんなことがあつたら、何等悲劇のともなわなない恋愛などと口にしても忪ではひどいかしやくを感じるのあたりまえの事だ。ひとの旦那様の恋愛と、ひとの奥様の恋愛をくらべてみると、月とすっぽんのような違いだ。ひとの奥様は恋をしてはならないのだ。支那へ行く

と、目隠しをされた牛が水車をまわしている。牛を追う男は、時々煙草たばこを出して吸ったり、空を見上げたりして、眼を愉しませている。さしずめ旦那様はその牛を追う男で、女は目隠しをされた牛のようなものだろう。牛も目隠しをとって、四囲あたりをながめさして貰いたいものだ。

美しくて朗らかで、誰にも迷惑を及ぼさない恋愛は童児たちでなければ望めないことも知れない。精神的なものがあふれて来るほど、恋愛は悲劇的でものがなくなってくる。恋愛の微醺とはどこの国へ行ったらあるのだろうか……。

どこの国でも、恋愛物語で埋れているようにいて、恋愛の微醺を説いた物語は皆無だ。恋愛は生れながらにして悲劇なのだろう。悲劇でもよいから、せめて浪漫ロマン的な恋をとおもうが、すでに、世の中はせち辛からくなっているとお互いの経済の事がまず胸に来る。

夫婦同士は貧しくてもいいけれど、恋愛は貧しくては厭だ。しみつたれて、けちけちした恋愛はまっぴらごめんだ。せめて恋愛の上だけでも経済を離れた世界を持ちたい。私はひとの奥さんだから、弱みそで困る。吸へどもかなし、ばらの花びら、こんな気持ちは心の上だけの遊びで、これも煙けむりのような懐情の一つ。

未婚の者同士の恋愛は、どんな楽隊がはいってもいいからはなばなくやってもらいた

いものだ。巴里^{パリ}の街のアベックのように、未婚の者の美しい恋愛は、遠くからみても、けつして厭なものじゃない。大いに微醺を享樂して貰いたいものだ。どんなに貧しい恋人同士でも、恋のさなかにあれば王侯の如^{ごと}しである。新らしい恋愛には経済も必要かも知れないけれど、ささやかながら、秩序正しく清純であつてほしい。

私も、やがて、としをとれば、素晴らしい恋愛論が書けるようになるかもしれない。書けるようになりたいとおもっている。一人や二人の男を知っただけでは本当の恋愛なんて判らないのじゃないだろうか……。やがて、壮麗な恋愛論を一つ書きたいものだ。

青空文庫情報

底本：「林芙美子随筆集」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年2月14日第1刷発行

2003（平成15）年3月5日第2刷発行

初出：「日本評論 昭和11年8月号」日本評論社

1936（昭和11）年8月1日発行

入力：林 幸雄

校正：noriko saito

2004年8月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

恋愛の微醺

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>